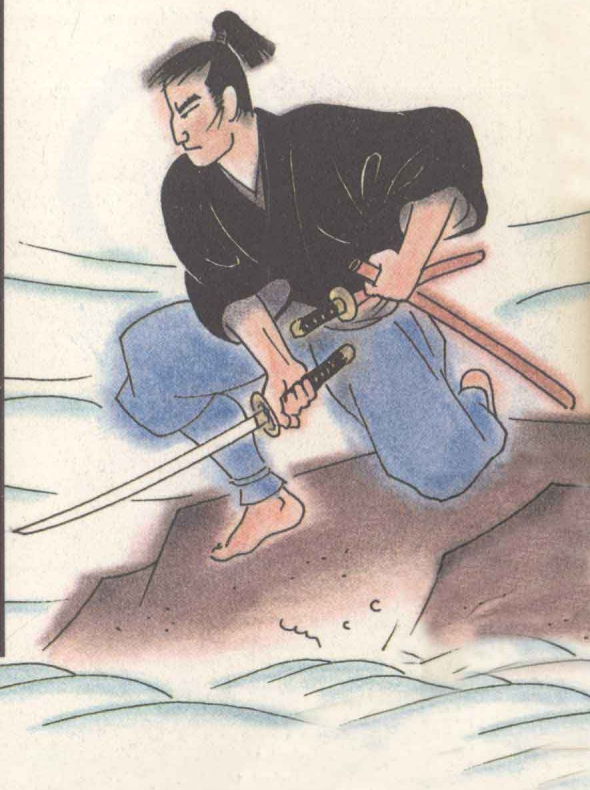


日本劍客伝・三

柳生十兵衛・山岡 莊八
堀部安兵衛・吉行淳之介



山岡莊八（やまおか そうはち）

1907（明治40）年、新潟生まれ。

1978（昭和53）年没。

吉行淳之介（よしゆき じゅんのすけ）

1924（大正13）年、岡山生まれ。

日本剣客伝 3 柳生十兵衛・堀部安兵衛

昭和57年4月20日 第1刷発行

定価 340 円

著 者 山岡莊八・吉行淳之介

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© WAKAKO FUJINO & JUNNOSUKE YOSHIYUKI 1982

Printed in Japan 0193-260863-0042

日本劍客伝 3

柳生十兵衛 堀部安兵衛

山岡莊八 吉行淳之介

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鐵 治

目次

柳生十兵衛 山岡莊八

鬼の子系図 9

柳生の風 20

いのちの本質 32

喰う人喰われる人 44

二羽の鷹 56

直線曲線 68

草の倫理 80

子の陰・父の陰 92

揺らぐ月影 104

私ならず 116

空駆ける 128

禪に還る 139

かくれんぼ 150

堀部安兵衛 吉行淳之介

高田馬場 165

浪士と義士 187

老婆 199

二人の安兵衛 211

刃傷事件 233

大雪の日 243

日本劍客伝
3

柳生十兵衛やぎゅうじゅうべえ

山岡莊八

『週刊朝日』昭和四十二年十一月二十四日号～四十三年二月十六日号掲載

鬼の子系図

一

柳生十兵衛三蔵について、つい最近まで公開されなかった同藩の萩原信之の筆になる正史と云つてもよい秘録「玉英拾遺」は、

「——若冠にして天資甚だ梟雄、早く新陰流に達し、その書を述作したまう。父君（但馬守宗矩）これを閲して不興あり。三蔵公頓首して退き、その後に至り、父君これ等の書に自跋して許可し賜う。或る日祈願するところあつて和州泊瀬山に参籠あり、この夜月明、行路の塘辺（堤のほとり）微風秋草を動かすを見たまいて、家流一書を著し、月見集と号したまう。その余、著述もつとも繁多、枚挙すべからず……」

と、記されている。

おそらくこの「玉英拾遺」のはじめの部分は父宗矩のこよなく信じた家老で、宗矩の死ぬまぎわ、將軍家光と「秘事」を語り合つたときに、宗矩の家来ではただ一人同室を許されたという野殿奎之助光則あたりの伝承をもとにして記録されたものであらう。それにしても藩の記録にさえ

「強剛」とか「梟雄」とか表現しなければならなかった十兵衛が、月下にそよぐ秋草のうごきを見て、「月見集」を著わしたという記述は、その性格の端倪すべからざる複雑さを想わせておもしろい。

「玉英拾遺」にもあるように、彼は「著述もつとも繁多、枚挙すべからず」というほど筆を執ることが好きであった。にもかかわらず、彼自身の生涯は殆んど謎のままである。その心境や兵法の工夫についての記述はあっても、彼自身の行動については殆んど云ってよいほど、何も記していない。

むろんこれは記録し得ない立場と環境におかれたことを意味するもので、書けなかった人の書かなかつたのとは全く異質のものである。

そう云えば、柳生十兵衛三厳は、本シリーズでこれまでに語られた所謂「剣客伝」中の人々とはかなり異質の剣豪である。

柳生の新陰流は十兵衛によって創始されたものではない。上泉秀綱の新陰流に、祖父石舟斎の無刀取りという心技両面の精緻が加わり、それが父宗矩に至って更に征夷大將軍の治国の兵法、「御流儀」としての内容を整えて来たもののものだ。

したがって、技法面を重視する名古屋の柳生家では、柳生新陰の祖は石舟斎宗厳であるとしているし、「葉隠れ」で著名な九州鍋島の支藩で、われこそ柳生新陰の道統を継ぐものと自負する鍋島元茂の小城藩では、直接師とした宗矩をもって流祖とし、今に至るもこれを神社内に祭祀している。

何れも領けないことではない。しかし、石舟斎の孫の十兵衛となると立場は違う。

彼もまた如何にわが家の兵法に関心を示したかは、その筆になる「武蔵野」や前記の「月見集」「月ノ抄」などによって明らかなのだが、これを父の宗矩は、決して喜んではない。

「——父君これを閲して不興あり」

と、「玉英拾遺」にはっきり書き残されている。その書の内容が未熟であつたからではない。後に至つて、

「——まあまあこれもよからう」

という意味の跋を書き添えてやつて、これをわが家に残させているのが何よりの証拠である。にもかかわらず、父の宗矩はこうした十兵衛の家業熱心に不興であり、叱られた十兵衛は、頓首して父の前から引き退つた。

実は、このあたりに十兵衛三蔵の生れながらにして背負わされた宿命とも云うべき特異な重荷がかくされている。

父の宗矩が嫡子十兵衛に期待しているのは、石舟斎から宗矩、宗矩から十兵衛という、柳生新陰流兵法の継承だけではなかつたのだ。

では、いったい宗矩は、わが嫡子に何を求めていたのであろうか？

結論から先に云えば、宗矩はこの嫡子に世俗の榮達には眼をくれぬ泰平維持の基礎を固めるための人柱……その犠牲と心構えを求めていたのだ。そうした犠牲がなければ、家康が考え、石舟斎が惚れ、更に宗矩が献身を誓っている平和な江戸時代の土台は完成しなかつた。

それは或る意味では完全な上忍（志に殉ずる忍者）の育て方に通ずるものかも知れない。

とにかくこの頃の宗矩は、新しい世代作りの夢に、自分のすべてを賭けていた。

決してわが子だけにきびしいのではなく、「御流儀」としての柳生新陰流を、ただの剣技ではなく、これを精神面で林道春の「朱子学——」に匹敵する、時代を貫く教学にまで高めさせたいとして夢中であつた。

その意味では四十から五十台へかけての宗矩は、世作りに憑かれた野心の鬼であつたと云つてもよい。

二

（どうすれば、兵法がそのまま、人間の教養に変わるであろうか？）

この苦心は戦国時代の剣豪たちが、どうすれば勝てるであろうかと、技法の練磨に寝食を忘れていったのから見れば進歩である。戦国はすでに終息した。と云つてその時代の遺風であり、常識であつた「槍尖で奪れ」とか「刀に賭けて斬り従える」とか云つた考え方は無くはならない。

斬り奪り強盗は武士の慣い……では兵法はどこまで行つても兇器であり、この兇器が幅をきかせている間は決して泰平はあり得ない。

武という文字は戈（戦）を止めると書き、平和を保つために武はあるのだと、そこまでは大抵わかつていながら、生兵法としての兇器は当時の巷に氾濫していた。

父の石舟斎が「無刀取り」の工夫を凝らしたうらにもこの嘆きがあつた。いっそ帯刀の習慣な

と廃せばよいのだが、そんなことは口にただだけで大殺戮の因にもなろう。

したがって柳生宗矩のこうした凄まじいまでに一途な野心は、時代や歴史の要求に逆行するものではなかった。

「——平和が欲しい！」

それは功成つて天下を掌握し得た徳川家だけの願望ではない。戦国以来の庶民の大多数の希いであり、その願望の流れと共に動いたところに徳川幕府成立の要因はあった。

当時、天下屈指の武芸家、兵法家は決して柳生一族だけではない。技法だけを問題にすれば、よりすぐれた武芸者があつたかも知れない。そして、それ等の「剣客」たちが、兵法の専門家として諸大名に召抱えられる場合の封禄は、大抵二、三百石……最上、五百石が相場であつた。

その中から、何故に柳生新陰流だけが、一万二千五百石という大禄を給されて、諸侯の列にまで加えられたか？ それを先ず明らかにしなければ、十兵衛三蔵の数奇な生涯の謎は解けない。いや、十兵衛だけではない、十兵衛の異母弟刑部少輔友矩もまた、父宗矩の願望の犠牲になつて二十七歳の若さで世を去っているし、その後、十兵衛のあとを飛騨守宗冬に継がれたとは云え、間もなく血縁の世襲は断たれて、大名としての江戸の柳生家は代々人物本位の養子相続になつていった。

云わば宗矩の悲願が子々孫々の安穩な世襲を封じ去つたのだと云つてもよく、その意味では代將軍家のお手直しという兵法の師にあげられていながら、徳川家と柳生家の関係は、世のつねの幸福さからは絶縁されて、法を継ぐ禅寺院的なきびしいものになつていった。

そうしなければ庶民の上に君臨する権力者、將軍家の指導は出来ないと考えたところに、柳生一族の……とりわけ宗矩の凄まじい士魂と良心があり、十兵衛三蔵の生涯は、その第一の犠牲の飛沫を真向から浴びて立つことになった……と、私は解している。

三

柳生宗矩の技法の秘伝はその父石舟斎宗厳から受けたものであることは云うまでもない。しかし、その人間的な薰陶はむしろ父よりも、家康によってより多くなされた。

当時又右衛門と云った宗矩が、父石舟斎に伴われて、はじめて家康に会ったのは文禄三年の五月で、場所は、後に本阿弥光悦が芸術村を営んだ洛北鷹ヶ峰の近く、紫竹村の陣所においてであった。

時に宗矩は二十四歳。父の石舟斎は六十八歳で、家康は働き盛りの五十三歳であった。

紹介者は黒田長政と云われている。家康がしきりに石舟斎の編み出した無刀取りという秘技を見たがっているからと、長政自身柳生の里まで出向いての懇望に、ことわり切れず、打太刀を勤めさせるため五男の又右衛門宗矩を伴って、家康の陣所に出向いた。

これが実は徳川・柳生両家の三百年にわたる不思議な結縁の端緒である。

家康はこの時、素手の石舟斎に木剣で立向い二度までそれを奪られて感嘆久しうしたと伝えられている。むろん当時「天下第一——」と称せられた石舟斎の秘技なのだ。その技法に舌を捲いたのはむろんであろう。しかし、それ以上に、家康は石舟斎の人物と見識に感嘆した。そして、

直ちに、石舟斎に誓書を入れて入門している。

誓書の日付は「文禄三年五月三日」。

慎重な上にも慎重な家康が、如何に初対面の石舟斎に囑望するところがあつたかわかるであろう。

そこで彼は早速、自分ばかりでなく、秀忠の師にもなつて貰いたいと申入れた。

しかし六十八歳の石舟斎は、老齡のゆえをもつて辞退し、強つてという家康の懇望に、

「——ならば、忤^{せがれ}の方を」

と、宗矩を家康に預ける氣になつた。この僅かな会見の間に、石舟斎もまた家康の人物にすっかり共鳴し傾倒していったらしい。

と云うのは当時両者は、共通の不安と懊惱^{せうのう}を持っていたからだ。

文禄三年は云うまでもなく、豊太閤が朝鮮に出兵して三年目にあたり、大明国^{みん}との講和は成立すると見て伏見の築城を急いでいる年である。

家康も、秀吉の供をして肥前^{なごや}の名護屋にあつたのだが、秀吉と共に京都へ戻り、鷹ヶ峰に野陣を張つて築城の手伝いを命じられていた。

家康は、豊太閤の出兵には始めから不賛成であつた。しかしそれに正面から反対は出来ない微妙な立場にあつた。

まだ旧領の駿・遠・参から迫られて関八州へ移されたばかり……秀吉の機嫌を損ずることは、そのまま自滅に通ずるからだ。